

マーク・トウェインのスピーチメイキング

金谷良夫

アメリカには話す文化が定着しており、その結果としてパブリック・スピーキングの伝統が確立されている。エイブラハム・リンカーン大統領(1809-65)、ジョン・F・ケネディ大統領(1917-63)、マーティン・ルーサー・キング二世牧師(1929-68)、そして昨今では、現バラック・オバマ大統領(1961-)らのスピーチが耳目を集めているが、忘れてならない偉大な存在にマーク・トウェインとして知られているサミュエル・L・クレメンズ(1835-1910)が強調できる。

トウェインと同時代を生き同じ文学者のウィリアム・D・ハウルズ(1837-1920)は、マーク・トウェインを評して、彼を「たぐいまれなる唯一のアメリカ文学のリンカーンだ」¹⁾と記したことは、ただ単に文学の分野においてのみならず、彼が例えば共通点としてリンカーンとその卓越したスピーチやユーモアを有するという意味においても言及されたことは言うまでもないだろう。それはトウェインがアメリカの偉大な小説家であることと同様、偉大な講演家であるからである。加えて、トウェインはアメリカ人の際立った特性を具現化したスピーカーである。トウェインは自分が生きた19世紀後半から20世紀初頭において、講演の専門家として名声を馳せていたのである。本稿では、トウェインのパブリック・スピーキングにまつわる、講演家としての歩みおよび講演やスピーチのテーマと意味について考察したい。

パブリック・スピーキングは、当時、アメリカの大衆の娯楽、教育および文化において人気を博する催しであった。南北戦争が終結する1865年ころまでに、あらゆる町に若者による大小さまざまな文芸の協会があり、凡そ10月から3月までのシーズンに6回から8回の一連の講演会がその町を訪れる講演者によって、公会堂やオペラハウスにおいて天候に左右されることなく行われていたという。²⁾ 講

1) William Dean Howells, *My Mark Twain: Reminiscences and Criticism*, p.80.

2) Paul Fatout, "Introduction," *Mark Twain Speaking*

演者には、博学者、説教師、大学教授、作家、ショーマンが含まれ、またテーマとしてモラル、政治、哲学、文学、歴史が専らその対象であったようだ。

さて、トウェインのテーブルスピーチや講演に関して言えば、数多ある中で記録として残っているものは彼の歿後直ぐに出版された『マーク・トウェインのスピーチ集』（1910）の他に何冊かの著作におさめられている。生涯で初めて行ったスピーチは、トウェインの批評家ポール・ファトーによればトウェインがちょうど二十歳になって間も無い1856年の1月17日に、アイオワ州のミシシッピ川に臨む町、キーオカクで印刷工の食事会においてであった。当時まだ印刷工であった彼は、正真正銘の即興スピーチをそこでベンジャミン・フランクリン（1706－90）の生誕の日に行ったのである。その8年後、彼は3年間近く住んだネバダ州で滑稽な諷刺文を数回話していた。³⁾ しかしその後、実際トウェインが述べるように、職業としては、「マーク・トウェインの初登場」と称した講演を彼が1866年10月2日、サンフランシスコで行ったことが最初であるということである。⁴⁾

トウェインの経歴を一通り見れば、彼はミズーリ州で生れ11歳のときに父親に死なれ学校を止め、その後印刷工見習い、印刷工、定期刊行物の編集長のアシスタント、雑誌や新聞の編集者、水先案内の見習い、水先案内、新聞への記事や手紙あるいは小品の投稿者、そして新聞記者を経て初めて1863年に「マーク・トウェイン」というペンネームを用いて作家の仲間入りをする。ところが、その時もまだ新聞記者を生業にし、カリフォルニア州、サクラメントの新聞社「ユニオン」の特派員として、1866年におよそ4ヶ月間サンドイッチ諸島（現ハワイ）に滞在しハワイについて知らせる旅行案内書簡を送ったのである。この経験がとりもなおさずトウェインが初めて講演者としての道を歩むことになった契機なのだ。

因みに、トウェインの人生はある意味では移動の連続だということができる。トウェインは全米をはじめ、カナダ、バミューダ、ヨーロッパ、パレスチナ、ロシア、オーストラリア、ニュージーランド、モーリシャス、セイロン（現スリランカ）、インド、南アフリカというように世界を又々掛けた。しかも、カリフォルニア大学バークレー校の「マーク・トウェイン・プロジェクト」の編集者であったロブ・ブラウニングによるとトウェインは、当時としては未曾有といってよい、

3) R. Kent Rasmussen, *Mark Twain: The Essential Reference to His Life and Writings*, p.278.

4) Mark Twain, *Speeches (The Oxford Mark Twain)*, pp. 221－23.

大西洋を29回横断したということである。こうした経験が彼の講演の材料になったことは想像に難くない。さらに、講演を中心にトウェインの遺した足跡を辿ってみよう。

1866年、トウェインはサンフランシスコにおける講演の成功の機を見るに敏、引き続きカリフォルニア州北部およびネバダ州で講演している。次は1867年にニューヨークで講演の成功をおさめる。その時の様子を彼は後に『自伝』において、クーパー・インスティチュート⁵⁾は「立錫の余地もなかった。私は幸せだったし、何とも言えないほど興奮した。……彼らは私が心ゆくまで笑い、歓声をあげた。1時間と15分の間私は天国にいた」⁶⁾と述べている。1867年には、彼はヨーロッパと聖地の旅に出て、その旅が基になって初めての旅行記、『愚直者外遊記』(1869)が出版される。1868年、トウェインは講演者のプロフェッショナルとしてサンフランシスコや中西部において精力的に講演を^{こな}熟し、1869年11月から1970年の1月の間も講演旅行に力を傾けている。

トウェインは、ニューヨークの富豪の娘、オリビア・ラングドン(1845-1904)と結婚した1870年になると、市民の要請があるにもかかわらず講演は「これ以上しない」と言いつつも、直ぐその誓いを覆し講演を再開する。トウェインは旅の苦難の耐え難さにしばしば不平を言っていたし、忙しすぎて孤独になる余地は少ないとはいえ、妻に会えない淋しさを払拭できなかったようだが、だからといって民衆の要求、とりわけ演壇で喋る喜びとその報酬には打ち克てなかったと考えられる。当時彼にとって、講演は正に主要な収入源だったのだ。事実、1871年11月から1872年の2月の間まで、その時トウェインは、自分が共同出資したニューヨーク州の「バッファロー・エクスプレス」という新聞社に關した借金を返済するために、講演旅行に出ている。その年の8月に彼はイギリスに渡り、1873年の11月と12月には、イギリス全土で講演を行っている。このようにトウェインが講演を最も活動的に行ったのは、1866年から1874年の間くらいまでだと言われている。つまり、彼は主要な小説を発表する前から、講演家としての名声を博していたということになる。その後もトウェインの講演は続き、1877年12月17日に、

5) クーパー ユニオンのもので、ニューヨークのマンハッタンにある鍊鉄の梁を使った現存するアメリカ最古の建築物。1860年にリンカーンが奴隷制廃止に関する有名な演説を行ったところ。

6) Mark Twain, *Mark Twain's Autobiography*, II, p.355.

会場の来賓の響盛を買う結果となった「スピーチの話」、すなわちアメリカの著名な詩人ジョン・グリーンリーフ・ウイッティアー（1807-92）の誕生日のディナースピーチをボストンで行う。1878年から1879年に、彼はドイツとイタリアに在住している。

トウェインは1881年に、カナダに2週間滞在し、その後1883年にも再訪している。1884年に彼は再び講演旅行に出るが、今度は小説家のジョージ・ワシントン・ケーブル（1844-1925）を携え、講演は1885年の2月まで続く。二人の講演旅行は順風満帆ではなかったとはいえ、成功し、事実彼は本を書くよりもっと金を稼げたと言っている。ケーブルは1885年の2月に、フィラデルフィアの音楽院で聴衆が3000人集まったと書いている。⁷⁾ トウェインは、聴衆が多ければ多いほどよく、男性が多いほうが講演は一層成功すると考えていたという。それは、そのほうが報酬は増えるし、男性のほうが女性より反応が豊かであるだけでなく女性が多いと男性が臆病にもなるからである。

トウェインの最高傑作『ハックルベリ・フィンの冒険』（1885、イギリスでは1884）が出版され小説家としての地位が確立された後でさえ、彼は依然として自分の作品の妙味のある朗読（トウェイン曰く「口語調」に言い換えた）を含む講演を続けたという特徴が、ここに際立って見出せる。見方を変えればそれによって作品の売れ行きが伸び、講演家としても有名になるという相乗効果をもたらしたことも事実であった。彼は1891年にヨーロッパへ赴き、1892年にベルリンに、1893年にイタリアに、そして1894年にはフランスに住んでいる。こうした国々でも彼が講演を行ったことは容易に想像できよう。ただ、『ハックルベリ・フィンの冒険』が出てからは金を稼ぐ手段としての講演の数はかなり減っていったようである。

だが1895年の7月から1年間、すなわちトウェインが59歳から60歳のときに意を決し、同時に老骨に鞭打ち、オハイオ州を出発しカナダ、ハワイ、フィジー、ニュージーランド、オーストラリア、インド、スリランカ、モーリシャス、そして南アフリカへと生涯最長の講演旅行を実行する。その目的とは、彼が事業家として失敗したページ植字機への投資や自分の出版社の倒産などで巨額の負債を抱

7) Arlin Turner, *Mark Twain and George W. Cable: The Record of a Literary Friendship*, p. 113.

えたからである。この長期講演旅行は成功をおさめ、単に債務を完済しただけでなく、『赤道に沿って——世界一周の旅』（1897）という旅行記を産み出し、さらにそのことが相俟って利益をも上げる結果になったのである。つまるところ、彼は終生卓抜なセンスを持つ話し手であったのである。

前述したように講演による収入は彼の生計を立てる手段でもあった。しかし、世界一周の講演旅行以降、トウェインは1909年の6月に行った生涯最後のパブリック・スピーチ、「少女たちへのアドバイス」を私設のエンジェルフィッシュクラブ⁸⁾ 会員の卒業式で行うまで、講演の報酬は受け取らないか、もしくは福祉団体に寄付したということである。

このように、トウェインにとって講演は長い年月に亘る彼の生涯の仕事でもあったと言え、言い換えれば、それはトウェインが話すことに非常に長けていた天才であり、しかも好きな講演に情熱を傾けたからこそそれだけ長く続いた所以であろうし、さらに早くから講演の奥義を究めていたと言うことができる。また、トウェインは後年、昔は気づかなかったが自分の母親について出会った中で最も能弁だったと振り返り、「ありのまま無意識の哀感」を内に含みそのことが力感あふれるものとなっていたし、「偉大な精神と偉大な心と魅惑的な言葉遣い」をしていたその母親の血を彼が引いたと考えられ⁹⁾、そしてその後のあらゆる経験が彼を雄弁ならしめ、話すことにおいてその天才を発揮したと言える。つまりトウェインは訓練が重要だということも折に触れ述べている。トウェインの際立った特徴は、正に書くことにおいてだけでなくこのように話すことにおいても実力をいかに発揮する希有な存在であるのだ。

次に、そのような講演やスピーチのテーマと意味を見てみよう。トウェインは講演やスピーチを生涯一千回近く行ったと言われており、そうしたテーマは多岐にわたる。先に触れたモラル、政治、哲学、文学、歴史はむろん含まれ、その他彼の体験を踏まえた旅行記を中心としたもの、人間一般、女性、少女、親友、自然、時事、葉巻、著作権、戦争、ビジネス、保険、剽窃、ユーモア、パロディー、ナンセンス、初舞台の経験、そして身近なものなど枚挙に遑が無いテーマになっ

8) 金谷良夫、「ドロシー・クイックとマーク・トウェイン」、『マーク・トウェインと私』、pp. 251-54.

9) Dixon Wecter, *Sam Clemens of Hannibal*, p.127.

ている。加えて、あまり「スピーチ集」のような本には載らない猥褻気味のものまである。トウェインは、旅行で得た体験と見聞を通して、旅行の体験が直接できない一般大衆に対しても教化および娯楽として講演し、同時に聴衆は笑い興ずるのだ。例えばモラルの話では、現コロンビア大学において、1906年に彼は「モラルと記憶」という講演をしている。その内容は西瓜を盗んだが熟しておらず、そうしたものを売るのはモラルに反しているというものであり、そのスピーチは今読んでも非常に面白く、笑いに誘われる。その中でトウェインのモットーは、「モラルをほかの人に与えよ」¹⁰⁾ だということ。モラルはトウェインの基本理念にある重要なテーマの一つである。言い換えればアメリカはモラルの国だと言っても過言ではない。

政治に関して取り上げると、例えば1901年に行った「タマニーとクローカー」において彼は、アメリカのタマニーホールのボスであるツイードと敵対関係にあったニューヨーク市の市議会議員のクローカーとを揶揄し、当時の政治腐敗を諷刺している。ここに社会批評家としてのトウェインの顔が覗ける。哲学的なテーマとして1906年の「不確かなときには、本当のことを述べよ」とトウェインがつくった格言を掲げ、具体例を示しつつ彼は人間観を説いている。ここはトウェインの人間性の探究者としての片鱗が窺える。あるいは、彼は早くから「女性の選挙権」の主題にあるように女性の参政権を一貫して推奨している。女性に関してのスピーチについて、「女性——一つの意見」(1901)で彼はテーマとしてユーモアを盛り込みながら母や妻あるいはジャンヌ・ダルクやイブに言及しつつ理想化して講演を行っている。1907年に、ワシントンD.Cでトウェインは政府に対して「著作権」というスピーチにおいて、その権利の保護を訴えており、このことは歴史上重要な出来事になっている。1881年にフィラデルフィアで行われた「プリマスロックとピリグラムファーザーズ」という歴史を表わすスピーチでは、トウェインは彼特有のユーモアを交えて実際ピリグリムファーザーズ自身でない人たちが、彼らのアメリカ大陸への上陸を祝う中で自分はミズーリ州のモラルとコネティカットヤンキーとの組み合わせであり、誰を祝えばよいのかと会場の人々に戯け、^{おど}アメリカ人の祖先はインディアンであり、彼らは誰をも祝うことができないのだという真実を語って揶揄している。

10) マーク・トウェイン、金谷良夫訳、『マーク・トウェインスピーチ集』、p.239。

先に言及した「ウイッティアーの誕生日のスピーチ」は、ウイッティアーのために南西部出身で当時33歳のトウェインが原稿をかなり練って用意したパロディーであり、「お上品な伝統」を持つ東部の文人たちエマーソン（1803-82）、ロングフェロー（1807-82）、ホームズ（1809-94）について詩のパロディーによって話したが、結局彼は彼らから顔を^{しか}顰められ、スピーチは大失敗に終わったのである。ヘンリー・N・スミスは、トウェインが「お上品な伝統を攻撃したヒーローとして後の世代が使う便利な過去を組み入れ、また彼がしただろうことに対して懲らしめられることは避けられないことだった」¹¹⁾と述べている。この晩餐会でのスピーチは、希な例として後世に残るトウェインの傷となっていると言えよう。一方、1879年に行われた「赤ん坊たち」は、元北軍の司令官であり第18代アメリカ大統領のユリシーズ・グラント（1822-85）をパロディーにして赤ん坊に譬えたスピーチであるが失敗作には至らなく、むしろ会場の人々は楽しんだということである。1900年に行われた「公共教育協会」では、トウェインは監獄より学校を支援したほうがよいと、教育の大切さについてユーモアを交えて語っている。アメリカのニューイングランドやハワイの自然を語った「天気」（1867）や「サンドイッチ諸島」（1866）の描写は殊の外美しい。

紙幅の関係からトウェインの全講演やスピーチをここで網羅することはできないが、彼が行った奇異な例として取り上げるべきものは、1947年まで出版されず、密かにパンフレットとして50部だけが世に出たスピーチ「自慰の科学に関する考察」であり、それは1879年にパリで行われた。これは自慰行為の長所や欠点に関するスピーチでかなり際^と疾いものであり、後にアメリカの「プレーボーイ」誌に取り上げられたほどである。

このように、トウェインはさまざまな状況においてさまざまな演題で講演やスピーチを通して、伝統には屈せず時には非礼と思われる内容を語っている。彼は物事の正当性、すなわち真実をユーモアで包んで語るのである。したがってそれは、かたくなに正論を吐いたり、融通がきかないような意見を陳述することではないのだ。彼はもちろん満座の中で人を辱めることもしない。多くのスピーチにおいて、彼の文学と同様に彼が真骨頂を発揮したのはユーモアを通して真実を語

11) Henry Nash Smith, "That Hideous Mistake of Poor Clemens's," "Harvard Library Bulletin," p.175. このスピーチに関してスミスはその著書 *Mark Twain: The Development of a Writer*, pp.92-112. でも詳述している。

り、何らかの重要な意味を伝えることである。端的に言えばトウエインにとって、随所にユーモアをちりばめたスピーチメイキングは語る力という芸術の追求である。彼は講演の前には、ふつう講演を単なる即興で行うのではなく十全な準備をしたと言われている。彼にとってスピーチメイキングは、多様な意味があり、一部触れてきたように生活の糧、名声の確立、演壇に立つ喜び、大衆の要求に応えること、ペンでの生活を十分に活かし自由にペンを取り真実を伝えること、そして真価を発揮するユーモアを抛り所とした笑いへの誘いだと言うことができる。

トウエインの際立つ特徴は、とりわけ彼が真髓を究めたユーモアがスピーチを創り、ユーモアから発する笑いが重要な意味を持つ。この意味では、彼の考え方は彼の著作の主題と一脈相通するものがある。トウエインの第2番目の遺著管理者(第1番目はアルバート・ペイン[1861-1937])、バーナード・デ・ボォート(1897-1956)が述べるように、トウエインはフロンティアのユーモア作家であり「限らない笑いを創造し」、笑いの創造に専念し作品に盛り込んだのである。そもそもトウエインは「口頭の」逸話から出発しており、彼の文学自体その目的は人物の具現化であり、一つの考えからの新たな真実の発見であり、またそのねらいは聞き手の娯楽であって、その源泉は手近なものであると指摘する。¹²⁾ さらに、トウエインの扮装役者として最も著名なハル・ホルブルックは、トウエインは「結局、アメリカ人が話す方法で書いた初めての作家である」¹³⁾ と述べている。われわれ読者はトウエインの文学を読む際そうした笑いに誘われ、それゆえに、スピーチにおいても「証拠が示される基準に基づいて、マーク・トウエインが講演したいと思ういかなる場所であろうと、いかなる時であろうと、いかなる状況であろうと、彼にとってよい聴衆の一つの不可欠な基準は——その笑いであることは明らかである」¹⁴⁾ というようにトウエインの講演の要諦は笑いである。トウエインは聴衆について、幾多のシーズンにおいて講演者として、ありとあらゆる公の晩餐会でスピーチしたので、大いなる秘訣を知っている——本から得たものではなく唯一経験によって獲得した¹⁵⁾ と述べている。1909年4月、経営者の晩餐会において、晩年を迎えていたトウエインは、彼の財務を担当しやはり晩年を迎

12) Bernard De Voto, *Mark Twain's America*, pp.92-93.

13) Hal Holbrook, "Forward," *Speeches*

14) Fred Lorch, *The Trouble Begins at Eight: Mark Twain's Lecture Tours*, p.242.

15) Mark Twain, *Mark Twain's Letters II*, p.542.

えていた親友のヘンリー・ロジャーズ（1840-1909、スタンダード石油会社の重役）に対し、「ロジャーズ氏」というスピーチを行うとき、席上で「何百万という人々を笑わせ——人の空ろな精神を示すうるさい笑いではなく、陽気な笑い、人間の心と人間の精神とを手助けする知的な笑いを齎した人として」紹介されたが、正にそのことが彼のスピーチの哲学を物語っている。トウェインが、聴衆を笑わせ、同時に教化し、その結果聴衆は何か有益なものを得たと感じながら満足して会場を後にするという構図が浮かび上がるのだ。

かようにトウェインのユーモアは、単なる聴衆や読者を笑わせるだけのものではなく、彼らに対して人間性において何か大切なもの——所謂、モラルや教えを含蓄するのである。彼は『自伝』の中で通常のユーモア作家は生き長らえないが、自分がそうできたのは自分のユーモアには教えが存在するからであると述べている。彼の含蓄に富む文章から成る「スピーチ集」でさえ現代に息づくことができたのは、それぞれの講演やスピーチが一つの物語を成し、そこに彼の精神が宿り、やはり教えが根底にあるからである。

別の見地に立てば、語りが彼の真の精神であると言ってよい。1895年に、トウェインは「物語の話し方」というエッセイの中で、「物語はいかに話されるべきか分かる」と断言するのは、長年最も専門的な語り手の中で毎日のように交わっているからである。いくつかの物語があるが、唯一難しいのは——ユーモラスなものである。ユーモアのある物語はアメリカ的だ¹⁶⁾と述べ、語りとユーモアを強く主張している。

トウェインは語りの達人であった。そして名優でもあった。1865年に出版した「跳び蛙」において、彼はサイモン・ウイラーを通してポーカーフェイスでユーモアあふれる物語を話している。『ハックルベリ・フィンの冒険』の中では、彼はハックやシャーバーン大佐、あるいは「王様」の語りを巧みに操っている。この作品の中には、実際にアメリカ南西部のいくつかの微妙な方言が使われており、トウェイン自身そうした表現を駆使していると述べている。その上彼らは皆演技のすぐれた役者である。こうした要素はトウェインの巧みなスピーチと演技力に由来する。繰り返せば、彼の書き方のみならず話し方さえも高い評価を得ているのである。

16) Mark Twain, *The Complete Essays of Mark Twain*, p.155.

しかし、われわれ読者はトウェインのスピーチを一つの場所、時間、空気の中で臨場感を覚えながら聴くことはできない。トウェインの世界が現前する雰囲気をつえなければならぬからである。とはいえ、彼と多くの時間を共有した親友のウィリアム・ハウルズの次の評言は象徴的である。

彼[トウェイン]が役者は作家の考えた台詞の効果を倍増するということを常に考えていたと指摘したが、彼は偉大な作家であるとともに偉大な役者でもあった。この点で他の役者とは違って彼は、非常に熟達した役者であり、自分の声や動作が舞台上で生彩を与える思考や着想を考えだす第一人者だった。並みの役者は表現でしかないが、クレメンズの技術は、表現に富むと同時に創造的であったので直に聴衆の胸に響くものであった。……彼はあらゆる言葉と音節を研究し、それを、テーブルの上にある器具——ナイフ、フォーク、食卓用塩入れ、またインクスタンド、ペン、箱、あるいは手元にあるものは何でも——それが要点と節と漸増法クライマックス[漸増的に重ねて行った最後の語句]とを表わし、すぐに消え去ることのない用語選択、および一定の示唆をしてくれた任意的配列法から成り立つ、彼特有の記憶術という体系的方法でそれらを暗記した。彼はあらゆる抑揚とあらゆる身振りを研究し、その想像上の聴衆に与える効果を予測した。それゆえ、彼を見ること、彼の話を書くことはすばらしいことだったが、彼はおのれが与えた喜びとおのれが加えた不意打ちといった一撃を大いに喜んだのである。そして彼は結末を考えていて、いつ止めるべきかが分かっていたのだ。¹⁷⁾

アメリカはとにかく、言葉で成り立っている国である。アメリカには講演やスピーチをともしなう紀行映画¹⁸⁾のシーズンがあるほどスピーチの文化は確立されている。スピーチは文字どおり聴く人がいなければ成立しないし、活字だけを読んでも実際その場に身を置かなければ直接それを聴き味わうことは不可能である。

17) ウィリアム・ハウルズ、金谷良夫訳、「序文」、『マーク・トウェインスピーチ集』

18) アメリカには16ミリや35ミリ映画などを用いて、観客に説明する有料の催しの文化がある。

もちろん、現在はたとえばさまざまなメディアや視聴覚機器を介して著名人のスピーチの映像を見たり音声を聞いたりして理解することは可能だが、トウェインが生きた時代はそうではなかったため、全米をはじめ世界中を回って直に講演やスピーチを行う以外方法はなかった。それに彼の語りの映像と音声は現存しないし、スピーチに関して新聞の論評を読んでも理解し難いため想像力を働かすほかない。それは、スピーチでは内容を、言葉の使い方、声、抑揚、身振りによって表現することが重要であるからである。

最後に、マーク・トウェインの講演やスピーチを通して、概括するとアメリカ人の際立った特性を具現化したトウェイン、本名で言い換えればサミュエル・L・クレメンズはアメリカという一つの大きな物語や人間性について巧みをこらして話し、それによって聴衆に彼の言葉が届きそうした人々の心を動かすことができる。聴衆あるいは読者は心に響いたトウェインの齎すユーモアによって笑い、また同時に啓発されるのである。

(2009年2月成稿)

参考文献

第一次文献

Twain, Mark. *The Complete Essays of Mark Twain*. ed. Charles Neider. Garden City, New York: Doubleday & Company, 1963.

Twain, Mark. *Mark Twain's Autobiography, I,II*. ed. Albert Bigelow Paine. New York: Harper & Brothers, 1924.

Twain, Mark. Howells, William D. *Mark Twain-Howells Letters: The Correspondence of Samuel L. Clemens and William D. Howells 1872-1910, I,II*. ed. Henry N. Smith and William M. Gibson. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University, 1960.

Twain, Mark. *Mark Twain's Letters, I,II*. ed. Albert B. Paine. New York: Harper & Brothers Publishers, 1917.

Twain, Mark. *Plymouth Rock and the Pilgrims and Other Speeches*, ed. Charles Neider. New York: Cooper Square Press, 1984.

Twain, Mark. 『マーク・トウェイン スピーチ集』(マーク・トウェインコレクション、第17巻)、金谷良夫訳 東京:彩流社、2001.

Twain, Mark. 「サンドイッチ諸島」金谷良夫訳、『ハワイ通信』、吉岡栄一他訳 東京:彩流社、2000.

Twain, Mark. *Mark Twain Speaking*, ed. Paul Fatout. Iowa City, Iowa: The University of Iowa Press, 1976.

Twain, Mark. *Speeches*, ed. Shelly F. Fishkin. New York: The Oxford University Press, 1996.

第二次文献

Barrow, David. "Afterward," *Speeches*. New York: The Oxford University Press, 1996.

DeVoto, Bernard. *Mark Twain's America*. West Point, Connecticut: Greenwood Press, 1978.

Holbrook, Hal. "Introduction," *Speeches*, New York: The Oxford University Press, 1966.

Howells, William D. *My Mark Twain: Reminiscences and Criticisms*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1967.

LeMasters, J. R. and Wilson James D. *The Mark Twain Encyclopedia*. New York: Garland Publishing, Inc., 1993.

金谷良夫 「マーク・トウエインの二面性」、『麒麟』第8号、神奈川大学経営学部17世紀文学研究会：平塚、2001.

_____. 「解説 ドロシー・クイックとマーク・トウエイン」、『マーク・トウエインと私——少女とマーク・トウエインの友情の物語』、野川浩美訳 東京：音羽書房鶴見書店、2009.

Lorch, Fred. *The Trouble Begins at Eight: Mark Twain's Lecture Tours*. Iowa City, Iowa: The University of Iowa Press, 1966.

Meltzer, Milton. *Mark Twain Himself*. Hannibal, Missouri: Becky Thatcher Book Shop, 1960.

Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain from A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings*. New York: Facts on File, Inc, 1995.

Smith, Henry Nash. "That Hideous Mistake of Poor Clemens's," "Harvard University Bulletin" Cambridge: Harvard University, 1955.

_____. *Mark Twain: The Development of a Writer*. New York: Atheneum, 1974.

Turner, Arlin. *Mark Twain and George W. Cable: The Record of a Literary Friendship*. East Lansing: The Michigan State University Press, 1960.

Wecter, Dixon. *Sam Clemens of Hannibal*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1952.